子どもが「学びをつなぐ」特別活動

特別活動研究班

昨年度までの研究の概要

特別活動における学びの特質は大きく２つある。１つは「なすことによって学ぶ」、すなわち、「課題を見いだす→原因を追求する→解決に向けて取り組む→ふりかえる」という一連の実践のなかで学んでいくということ。もう１つは、各教科等で育んだ資質・能力を総合的に生かしながら学んでいくということである。

その２つの特質を踏まえ、特別活動研究班では、特別活動における「学びをつなぐ」姿を以下のように捉え、一昨年度から研究に取り組んでいる。

- ○　各教科等の学習を、特別活動での活動や実践をとおすことによって深めている姿
- ○　特別活動での活動や実践をふりかえり、新たな課題や目標を見いだす姿
- ○　特別活動での活動や実践をとおして学んだことを、他の活動や実践、各教科等の学習に生かす姿
- ○　自分と仲間、仲間同士の思いや考えをつなぎながら合意形成を図り、話し合う姿
- ○　活動や実践をとおして学んだこと、見いだした自分や仲間のよさや可能性を、よりよい学級・学校での生活づくりや、よりよい人間関係の形成、自己実現に生かそうとする姿

１年次は、子どもが課題を自分事として捉えられるようにするための手立てについて研究した。そのなかで、課題に対する自分自身や仲間との認識にずれを生じさせることが、よりよい合意形成や意思決定、その後の活動や実践への意欲につながることが分かった。２年次は、検証内容を学級活動⑶に焦点化し、よりよい自己実現へつなげるための指導の在り方について研究した。そのなかで、課題への認識のずれを生じさせることが、一人一人が新たな課題や目標を意思決定するための有効な手立てとなることが明らかになった。しかし、継続して目標を意識するために、キャリア・パスポート等をとおして目標を定期的にふりかえらせる必要性や、子どもの実態に合わせた評価規準を設定する必要があることが最終のまとめとして挙げられた。そこで３年次は、キャリア・パスポートの活用の在り方や、評価規準の設定の在り方について研究を行っていくこととした。

研究内容

1　子どもが「学びをつなぐ」ための学習指導の在り方
⑴　キャリア・パスポートの活用の在り方
⑵　子どもの実態に合わせた評価規準の設定の在り方

研究内容の基本的な考え方

1　子どもが「学びをつなぐ」ための学習指導の在り方

⑴　キャリア・パスポートの活用の在り方

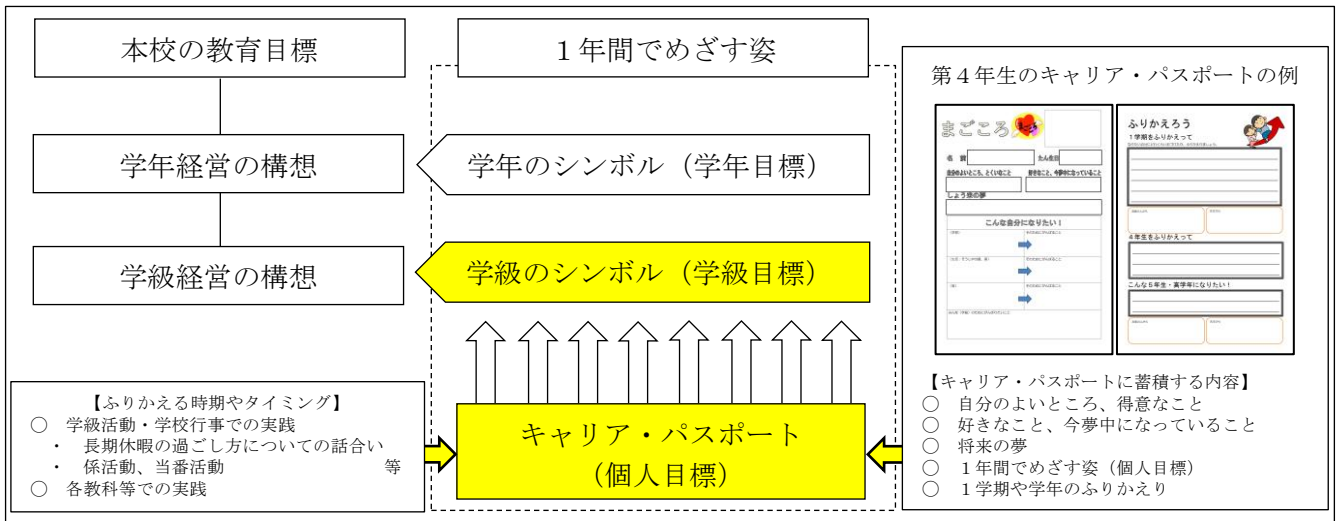
特別活動の大きな目標は、活動や実践をとおして学んだことを日常における人間関係の形成や、社会参画、将来に向けた自己実現に生かそうとすることである。この目標を達成するために、特に学級活動⑶の指導に当たっては、学校、家庭及び地域における学習や生活の目標と見通しを立てることが必要である。また、学んだことをふりかえりながら、新たな学習や生活への意欲につなげたり、将来の生き方を考えたりする活動を行うことも必要である。その際に、キャリア・パスポートを活用することが有効ではないかと考えた。

「キャリア・パスポート」とは、子どもが活動をふりかえって気付いたことや考えたこと等を記述して蓄積する、いわゆるポートフォリオ的な教材である。本校では、自分の得意なこと、好きなこと、将来の夢や１年間でめざす姿（個人目標）等を４月から６月に記述し、学習や生活の目標と見通しを個人で立てている。

また、学習や生活の目標と見通しを学級全体で立てるために、「学級のシンボル（学級目標）」を以下のように設定している。

○　学校の教育目標、学年・学級経営の構想、教師の願いを基に、教師が設定している（第１学年）。
○　上記に加え、一人一人の個人目標も基にしながら、子ども同士で話し合って設定している（第２学年以上）。

そこで、３年次は、図１に示したように、キャリア・パスポートに記述した１年間でめざす姿（個人目標）が、学級のシンボル（学級目標）につながっていることを踏まえて研究を進めていく。具体的な方法としては、学級活動・学校行事及び各教科等での実践について、学級目標と個人目標とを関連付けながら話し合わせ、目標や実践内容を意思決定することができるようにする。そのなかで、キャリア・パスポートを活用する時期やタイミングはどうあればよいかを究明し、継続して個人目標を意識することができるようにしたい。



【図１　学級のシンボルとキャリア・パスポートの関連性】

⑵　子どもの実態に合わせた評価規準の設定の在り方

本校の学級活動の評価規準は、国立教育政策研究所による、「『指導と評価の一体化』のための学習評価に関する参考資料」にある例示と同じような観点と趣旨で設定している。この評価規準を本校の子どもの実態に合わせて設定し直すことで、ねらいをより明確にした授業を構想することができるのではないかと考える。

そこで、本年度は、以下の方法をとって子どもの実態に合わせた評価規準の設定の在り方を究明する。

①　本校で設定した学年・学級経営の構想を基に設定する。
②　文部科学省「キャリア教育の手引き」に示された基礎的・汎用的能力の具体例を基に設定する。
③　キャリア教育にかかわる道徳的価値について、道徳科の学習指導要領に示されている発達の段階ごとの指導の要点を基に設定する。

研究の実際

1　子どもが「学びをつなぐ」ための学習指導の在り方

⑴　キャリア・パスポートの活用の在り方

①　第１学年「たのしいなつやすみ」における実践より

本実践においては、小学校で初めての夏休みを迎える時期に、夏休みの目標を意思決定させた。その際、６月にキャリア・パスポートに記述した個人目標や、これまでがんばってきたことをふりかえらせることで、継続して個人目標を意識することができるように学習活動を展開した。

【６月】
キャリア・パスポートの個人目標を決定する。

→ 決定した個人目標の意識付けを図る。

→ **【７月】**
夏休みの目標を意思決定する。

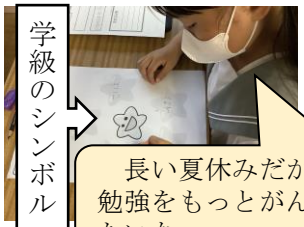
→ 意思決定したことを夏休みに実践する。

→ **【９月】**
夏休みの実践をふりかえる。

1　これまでのふりかえり

ひらがなを書けるようになったな。

2　夏休みの目標の意思決定



長い夏休みだから、勉強をもっとがんばりたいな。

3　キャリア・パスポートへの記述

キャリアパスポートに夏休みにがんばりたいことや、新しくできた夢も書き加えておこう。

キャリア・パスポートの目標や、「一人一人が輝いてほしい」という意味が込められた学級のシンボル「きらきら」を基に、夏休みの目標を考えさせた。それにより、１年間でめざす姿をイメージしながら夏休みの目標を意思決定する姿が見られた。また、キャリア・パスポートに記述した内容に書き加えや修正をしてもよいことを伝えることで、夏休みの目標に合わせて個人目標を調整したり再設定したりする姿が見られた。このように、長期休暇の目標を決める時期に、キャリア・パスポートを活用させたことで、継続して個人目標を意識することができたのではないかと考える。

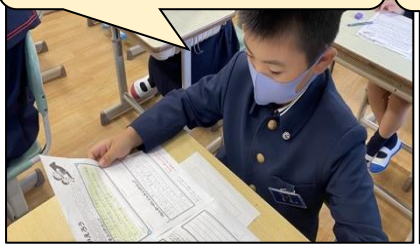
②　第４学年「自分に合った係活動の役割を決めよう」における実践より

本実践においては、係活動での自分の役割を意思決定するタイミングで、キャリア・パスポートを活用させた。その際、事前にキャリア・パスポートに係活動の目標を書かせておくことで、継続して個人目標を意識することができるように学習活動を展開した。

作文を書くことを目標にしていたな。これを係活動に生かすことはできないかな。

ピアノを弾くのが得意だったら、映画係で作る映像にピアノの曲を付けてみるといいかもね。

企画に必要な役割は、まとめる人、企画を考える人、審判をする人、お知らせをする人だね。



係活動について話し合う際に、学級のシンボルに込めた意味「思いやり、協力し、助け合う学級」に着目させることで、学級目標や個人目標の達成に向けて必要な係活動を設定する姿が見られた。また、事前に書いておいた係活動の目標から、自分の役割を意思決定する姿も見られた。これらのことから、係活動の内容を記述する欄を設けるなど、キャリア・パスポートの形式を工夫する必要があることが分かった。

⑵　子どもの実態に合わせた評価規準の設定の在り方

⑴の②の第４学年の実践において、国立教育政策研究所の例示する学級活動⑶の評価規準を、本学級の子どもの実態に合わせて設定し直し、ねらいをより明確にした授業を構想することができるようにした。図３のそれぞれの下線について、①は学年・学級経営の構想、②は文部科学省「キャリア教育の手引き」に示された基礎的・汎用的能力の具体例、③は道徳科の学習指導要領を基に設定し直したものである。

よりよい生活を築くための知識・技能	集団や社会の形成者としての思考・判断・表現	主体的に生活や人間関係をよりよくしようとする態度
希望や目標をもつこと、働くことや学ぶことの意義を理解し、将来への見通しをもち、自己実現を図るために必要な知識や行動の仕方を身に付けている。	希望や目標をもつこと、働くことや学ぶことについて、よりよく生活するための課題に気付き、解決方法などについて話し合い、自分に合った解決方法を意思決定して実践している。	現在及び将来にわたってよりよく生きるために、見通しをもったり振り返ったりしながら、自己のよさを生かし、他者と協働して、自己実現に向けて意欲的に行動しようとしている。

【図２　国立教育政策研究所の例示する学級活動⑶の評価規準】

よりよい生活を築くための知識・技能	集団や社会の形成者としての思考・判断・表現	主体的に生活や人間関係をよりよくしようとする態度
③働くことの大切さを理解し、②日常の生活と将来の生き方とを関連付け、自己実現を図るために必要な知識や行動の仕方を身に付けている。	②働くことについて、①「思いやり、協力し、助け合う」学級にするための課題に気付き、解決方法等について話し合い、①②自分にできることや、やりたいことを意思決定している。	①「思いやり、協力し、助け合う」学級にするために、見通しをもったりふりかえったりしながら、①自分や仲間のよいと思うことを考え、自分と異なる考えや意見を受容しながら諸活動に取り組もうとしている。

【図３　第４学年の実践で設定した評価規準】

ねらいが明確になったことで、学級のシンボルに込めた「思いやり、協力し、助け合う」学級に近付くという目的意識をもって係活動に取り組もうとしている姿を評価することができた。また、実践のふりかえりでは、子どもを称賛する視点にもなった。今後は、設定し直した評価規準を、ふりかえりの視点として活用させることで、子どもがより具体的に実践をふりかえることができるようになるのではないかと考える。

今年度の研究のまとめ

１　子どもが「学びをつなぐ」ための学習指導の在り方

⑴　キャリア・パスポートの活用の在り方

○　学級活動・学校行事での目標を意思決定する時期に、学級のシンボルやキャリア・パスポートを関連付けさせることで、１年間でめざす姿を思い出し、継続して個人目標を意識する姿が見られた。

○　学級活動・学校行事とキャリア・パスポートを関連付けさせることで、キャリア・パスポートに記述した、自分の得意なこと、好きなこと、将来の夢や１年間でめざす姿等を生かして実践しようとする姿が見られた。

○　キャリア・パスポートに記述する内容については、学校全体で話し合い、次の学年で活用できるよう、新たな内容を記述する欄を設けるなど、形式を探究していく必要があることが明らかになった。

●　題材とキャリア・パスポートを関連付けさせる際は、発達の段階を考慮する必要があった。

⑵　子どもの実態に合わせた評価規準の設定の在り方

○　子どもの実態に合わせた評価規準を設定し直すことで、ねらいをより明確にした授業を構想することができた。

●　実践のふりかえりの在り方として、設定し直した評価規準を活用する方法を探究する必要があった。

●　評価規準の観点と趣旨については、今後学校全体で話し合ったうえで設定していく必要があった。

参考文献：「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料
国立教育政策研究所教育課程研究センター　2020
小学校キャリア教育の手引き　文部科学省　2022